

J A経営でリスクマネジメントの必要性はいうまでもないが、このリスクとは何を意味するのだろうか。リスクはない方がいいに決まっている。しかし、リスクがなければ、収益が生まれな

いのも事実である。

リスクという言葉はあまりにも曖昧で得体の知れないものだが、リスクコントロール

扉のみのみどり

経営コンサルタント・加島 徹

という言葉があるように、リスクの内容が分からなければ、コントロールのしようがない。

経営管理やリスクマネジメントでコントロールしようとするリスクとは、将来のある

シユフローがどう変化するかを金利リスクと称している。

リスクを将来キャッシュフローの変化額として捉えやすくと、リスクの実態は捉えやすくなる。数値で把握すること

ることは、いかに利益水準を確保するかを重視することに他ならない。取扱高がいくら伸びても、それにかかるコストが多ければ得られるキャッシュフローは少なくなってしまう。

これまでJ Aでは取扱高を中心

安定収益重視しよう

これまでJ Aでは取扱高を中心

事象が起きた時に、どれほど将来のキャッシュフロー(実際の金の流れ)が変わるか、そのキャッシュフローの変化額として捉えている。例えば金利が急激に上昇して調達コストが上昇した時に、キャッ

リスクコントロールとは、事業を通じて得られる将来のキャッシュフローの損失を最小化し、得られるキャッシュフローの最大化を図ることに他ならない。

すことが、経営を良くすることと同義語であった。だが、リスクマネジメントでは取扱高や事業分量ではなく、J A経営から生み出されるキャッシュフロー、安定収益を確保するかが課題になる。

プロフィール

かしま・とおる 博士(農業経済学)。1982年J A全中入会。全国監査部次長、経営改善対策部次長を経てJ C総研主席研究員。2011年に(株)協同経済研究所取締役専務に就任。東京農業大学客員研究員。

J A経営にリスクマネジメントが定着化するとは、これまでの事業分量主義だったものを、安定収益やキャッシュフロー重視に経営文化を变えることに他ならない。